

サンフランシスコ市への「慰安婦」記念碑設置圧力を直ちに中止するよう求めます

吉村大阪市長は9月29日、姉妹都市であるサンフランシスコ（以下、SF）市長あてに公開書簡を送付し、9月22日にSF市民によって設置された日本軍「慰安婦」記念碑を市として公認しないよう求め、それが受け入れられなければ姉妹都市を解消せざるを得ないと迫ったことが明らかになっています。

2013年に、当時の橋下大阪市長が「慰安婦制度は必要だった」などと発言したことに対し、SF市議会が非難決議を全会一致で採択するということがありました。その後も、歴史的事実から目を背け、被害者を侮辱する発言を繰り返す橋下市長が国際的にも非難を浴びるなか、予定していたSF市への視察を断られる事態に発展したことは、吉村市長もよくご存じのはずです。

SF市議会で「慰安婦」記念碑の設置が満場一致で可決されたのは2015年9月22日のことでした。日系・韓国系・中国系を含む現地市民らが、過去の過ちを記憶し、人身売買や女性への暴力に反対するために市内に設置を求めていたものです。

ところが、吉村市長も今年2月と3月に、エドウィン・リーSF市長宛に書簡を送り、碑の設置を中止させるよう求めました。これに対しSF市長は、「わが市には、公的や民間によって建てられた多くの記念碑がある。『慰安婦』の碑は民間のプロジェクトが先導して進めたものだが、姉妹都市関係を壊そうと意図したものではない」「碑文の文言は事実で、記念碑の真の目的は被害者の名誉、市民の教育のため」と書簡で答えました。

SF市長として市民の意思や行為を尊重し、歴史の事実を踏まえ、人権尊重の理念に従い、当然の対応をしていることが伝わってきます。それにも関わらず、吉村市長は9月22日、SF市民らの手で「記念碑」除幕式が行われると、再度書簡を送り、「記念碑を市として認める場合は、姉妹都市を解消する」と恥ずかしげもなく抗議したのです。

これに対し、エドウィン・リー市長は10月2日付書簡で、「大きな落胆を覚える」「公職にあるものとして、たとえ批判にさらされても地域に対して応えていくことが責務」「過去ではなく、未来を見るべき」と返答してきたことが報道で伝えられました。これを受けてもなお、吉村市長は会見で「（碑文の内容が）日本政府の見解と違う」「姉妹都市関係を根本から見直さざるを得ない」と発言しています。このような言動は、公職にある者として歴史に向き合う時に、また、国際関係を進める時にとるべき態度ではないことは明らかです。ダイバーシティ大阪をめざす多くの市民の支持も得られるものではありません。

おりしも今年はSF市との姉妹都市提携から60周年であり、今月にはSF市から訪問団を迎えて記念行事を行う予定もあります。吉村市長は書簡で「このような動きが現地コミュニティに分断を持ち込み、姉妹都市交流にネガティブな影響を及ぼす可能性がある」ことを心配しているとのことですが、そうした憂慮を引き起こしているのはまさに市長自身です。

歴史の事実を否定し、女性の人権を蔑ろにするこうした考え方の背景には「日韓合意」以降の日本社会に蔓延する「慰安婦」問題は解決したにもかかわらず、韓国社会と政府が蒸し返しているとの決めつけがあります。国際社会において「慰安婦」問題は未解決であるばかりか、現在進行形の女性に対する暴力にほかなりません。

大阪市長としてこの間の対応を反省し、再びこのような恥ずべき行為を行わないこと、今後歴史認識をあらため、女性の人権が守られる社会の構築のために努力するよう強く求めます。

2017年10月13日

日本軍「慰安婦」問題・関西ネットワーク